

去る十月十一日、ハノイに懸案の日本大使館が開設された。インドシナ戦後の復興と建設にたいするわが国の役割への期待が高まっている。おりに、きわめて意義深いことだといわねばなるまい。

私はこの九月上中旬に東南アジアをまわってみて、日本にたいするイメージが大きく変わっていることに気がついた。周知のようにいまから一年半ばかり前、東南アジアを歴訪した田中元首相への激しいデモに象徴されたように、東

●外交時評

安定勢力・日本への期待

中嶋嶺雄 (東京外国語大学助教授)



南アジアには反日感情が高まり、厳しい対日批判が相次いだ。七〇年代初頭以来の「日本軍国主義」批判の潮流と結んで、エコノミックアニマル像が批判された。いうまでもなく、六〇年代の高度経済成長を背景に肥大化した日本の経済構造が東南アジアに「流出」して、日本のオーバープレゼンスをもたらし、対日批判をさそったのであった。

だが、今日、状況は大きく変わっている。去る七月下旬、タイのチャーチャイ外相は、訪問した民社党の春日委員長にたいし

「もし日本がASEAN諸国に武器援助を行ってくれるならば、ASEANの安定は一層増すであろう」

と述べて、われわれを驚かせた。その実行可能性はともかく、日本の「軍国主義」をおそれ、日本の経済進出を批判してきた東南アジア諸国の発言として、この発言は注目される。

チャーチャイ外相は、この九月中旬に日本を訪れ、日本の再投資を要請する一方、右の発言については、これを打ち消すかのような発言をし

たが、私が現地で通訳に当たった人から聞いたところでは、やはりそのように発言したそうだし、むしろ、民社党という少数野党の指導者との会話なので、つい本音を吐いたとも思われる。ともかくタイは「アメリカ離れ」を宣言したものの、自国の安全保障のために武器が必要だし、中ソの「覇権」競争はタイにも及んでし

のぎをけずっているだけに、日本との関係を見直さざるを得ないのである。私はバンコクで、ハノイへ出かけた日本商社員が、北ベトナムの責任者から

「われわれはぜひ日本から物を買いたいし、日本に買ってもらいたい。ベトナム戦争勝利まではソ連の経済・軍事援助にたよらざるを得なかったが、これ以上ソ連の影響を受けたくない。中国にもっと警戒的にならざるを得ない。この点、日本とはコマージュルベールで取引できるので安心だ」

という趣旨の説明を受けてきたことを聴取したが、このハノイの声も、やはり「本音」だと思

う。それだけに、今回の在ハノイ日本大使館開設の意味は大きいといえよう。インドシナ戦後のアジアの新しい流動のなかで、米・中・ソのバランスはいまだ未定着であり、中ソは激しく抗争しあっている。そのよう

なとき、日本は七〇年前半のように、アジアの問題児ないしは現状打破勢力であるのではなく、むしろ、アジアの安定要因として見直され

はじめてるのである。たまたま、去る九月に発表された今年度の『外交青白(わが外交の近況)』は、「総説」のなかで「わが国は、大戦後三十年間にわたって平和を享受し、戦後復興と順調な経済発展を続けることによって、世界における安定勢力としての地位を占めるに至った」と述べている。「安定勢力」としての日本の真